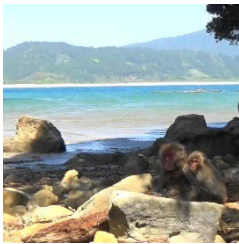
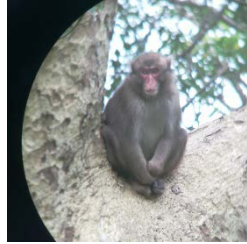


「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 29 年 5 月 12 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生
氏名	佐藤 侑太郎

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本、宮崎県幸島・都井岬
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
ニホンザル・野生馬の観察
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 29 年 4 月 16 日 ~ 平成 29 年 4 月 22 日 (7 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学野生動物研究センター幸島観察所、杉浦秀樹准教授
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
目的 本出張は、宮崎県幸島に生息するニホンザルの観察を通して、動物の行動観察とフィールドワークの基礎知識を習得することを目的に行われた。
概要 4月16日(日)に幸島観察所へ出発し、17日(月)午前に船で幸島に上陸した。20日(木)まで幸島においてフィールドワーク、キャンプを行い、20日(木)の午後に船で本土へ戻った。21日(金)に幸島観察所にてデータの分析、プレゼンテーションを行った。22日(土)午前に都井岬にて野生馬を観察した。同日午後、帰宅した。
所感 野生ニホンザル集団の観察は今回が初めてであったため、森の中での観察は特に難しく感じた。幸島には主群とマキ群とよばれる2群が生息している。そのうち主群は、砂浜で人が撒いた餌を食べているため人に慣れている印象を受けた(図1a)。一方、マキ群は森の方にいることが多く、主群と比較して人に慣れていなかった(図1b)。同じ地域に生息しているにもかかわらず、このような違いが生じるというのは興味深かった。 17日から19日までは、キャンプを設営し幸島に宿泊した。天候が悪化することが懸念されたが、幸い実習に大きな影響はなかった。天気の良い日は素晴らしい眺望を楽しむことができた(図2)。サルをなかなか発見できない日もあったが、森の中では植物やサルの死体など様々なものをみることもできた(図3)。 21日はプレゼンテーションを行った。他の参加者の発表では、短い観察日数にも関わらず実のある考察がされており、大変勉強になった。今後の参考にしたい。 22日は都井岬で野生馬をみることもできた(図4)。係の方に生まれたばかりの仔馬がいることを教えていただき、観察することができた(図5)。
 
図1. (a) 浜辺で休む2個体(左:4月19日撮影)。(b) 森の中で観察した個体。この写真は双眼鏡を通して撮影した(右:4月18日撮影)。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



図 2. 標高の高い所からの景色 (4月19日撮影)。このとき、離れた所からサルの声が聞こえ、観察に向かった。



図 3. 山中でサルの死体を発見した (4月19日撮影)。歯の形態から、若年個体ではないかと予想された。

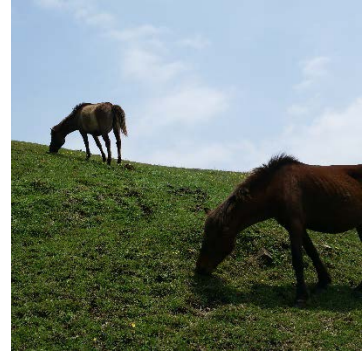


図 4. 都井岬で観察した野生馬 (4月22日撮影)。



図 5. 母親の乳首を吸おうとする仔馬 (4月22日撮影)。

6. その他 (特記事項など)

引率の杉浦秀樹准教授には出発準備から実習中のサポートなど多岐にわたってご支援いただいた。幸島観察所の技術職員 鈴木崇文氏にはニホンザルに関する情報をご提供いただいたほか、滞在中の生活面において暖かいご支援をいただいた。この場をお借りして感謝申し上げます。

また、幸島実習の参加者である京都大学野生動物研究センター 岡桃子氏、楊木萌氏、Mi Yeon Kim 氏、人類進化研究室 田伏良幸氏、霊長類研究所 Himani Nautiyal 氏の協力に感謝申し上げます。

幸島実習期間中に幸島にて調査を行っていた3名の調査者の皆様においては、自らの研究の時間を割いてまで、私たちの実習にご協力いただいた。厚くお礼申し上げます。